

病理診断部

1. スタッフ（平成27年4月1日現在）

部長（教授）	福嶋 敬宜
病院講師	鈴木 司
医員（教授）	仁木 利郎（兼務）
	田中 亨（兼務）
	（准教授）金井 信行（兼務）
	（講師）河田 浩敏（兼務）
	（学内講師）仲矢 丈雄（兼務）
	（助教）吉本多一郎（兼務）
	（助教）森田 剛平（兼務）
	（助教）天野 雄介（兼務）
シニアレジデント	2名
技師（副技師長）	芳賀 美子（兼務）
	（主任）星野真紀子（兼務）
	（主任）鈴木 智子（兼務）
	（主任）本望 一昌（兼務）
	ほか、技師 12名、事務員 2.5名

2. 病理診断部の特徴

病理診断部は、自治医科大学附属病院の中央施設部門に属し、自治医科大学附属病院および一部さいたま医療センター（腎生検の電子顕微鏡検索用検体）で採取された検体について生検診断、細胞診断、術中迅速診断、外科切除検体の病理診断、剖検診断などを行っている。

病理診断部では、提出されたすべての検体について病理医による適正な標本処理、必要十分な切り出し、病理検査技師による質の高い標本作製を行い、最終的に病理診断専門医による顕微鏡標本の観察を総合して病理診断を行っている。

また、必要に応じて免疫組織化学的検索、蛍光抗体法、電子顕微鏡検索、PCR解析を行い、複数の病理医による相互チェックを経て病理診断報告書（診療端末閲覧）を作成している。

診療における病理診断の関与が特に大きい呼吸系、消化器系を中心に、臨床病理合同カンファレンスを行い、病院の診療レベルの向上に寄与している。

病理診断部は、医学部および研修医教育の一部も担当している。医学部では、臨床病理カンファレンス（CPC）（M4,M5）全15回を行い、必修BSL（M4）、選択必修BSL（M5,M6）の学生も受け入れている。

また、昨年度から、消化器内科からの希望で、医師1名を週1日、病理診断研修のために受け入れている。

さらに、各科の研究支援の一環として、病理パラフィンブロックや組織スライドガラス標本の貸し出しや管理を行っている。

・施設認定

日本病理学会認定施設
日本臨床細胞学会認定施設

・認定医

日本病理学会専門医：福嶋 敬宜 ほか8名
日本臨床細胞学会専門医：福嶋 敬宜 ほか5名

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 病理診断件数の動向

平成26年における生検診断は14,681件、細胞診は18,753件、術中迅速組織診断は814件、電顕271件、剖検診断は46件である。昨年からはほぼ横ばいであるが、剖検数は昨年の1.5倍となった。免疫組織化学検査件数は最近の約5年で1.5倍を超えたが、その後は少し落ち着いている。ただ、臨床各科からの要求などは実感としてますます増えている。細胞診は件数では大きな変化はないが、超音波内視鏡下針穿刺吸引細胞診の件数は増加している。いずれの診断も治療選択に大きな影響を及ぼすことから、臨床科との密な連携を心掛けたい。

2) 部門統計（2014年）

■病理組織診断件数：	14,681件
標本ブロック数	71,086個
ヘマトキシリン・エオジン標本	118,242枚
特殊染色	28,893枚
■迅速診断：	814件
ブロック（検体）数	1,516個
■細胞診件数：	18,753件、41,675枚
パパニコロー染色	36,778枚
特殊染色	4,763枚
<検体別の件数>	
婦人科関連	11,544件
呼吸器	1,773件
泌尿器	2,341件
甲状腺	329件
乳腺	181件
消化器	315件
リンパ節	215件
体腔液	1,789件
他	266件
■電子顕微鏡検索：	271件
■免疫組織化学染色：	2,091件
Her2蛋白検査件数：	443件
ER&PR：	425件
■蛍光抗体法検索：	229件

■In situ hybridization法検索：	79件
■FISH法検索：	55件
■PCR法検索：	21件
■病理解剖診断：	46件

3) 病理診断精度管理について

組織検体の切り出しは、小手術検体や生検検体については、病理医と臨床検査技師が相互に検体と検査申込書を確認しながら共同で、外科手術検体については病理医が検査申込書を参照しながら行うようにしている。この切り出し作業時に、申込書と提出された検体に食い違いや不明の点がある場合には、その場で、検体を提出した医師に連絡を取り疑問点を明らかにしてから作業を再開するようにしている。

組織診断報告は、講師以上の認定病理専門医によるダブルチェック体制で行っている。問題症例については、必ず、複数の病理専門医によるチェックを行い、必要に応じて外部へのコンサルテーションも行っている。

免疫組織化学染色標本は、担当技師と病理医が、その日のすべての標本について、染色性の妥当性について評価した後で診断医に渡すようにしている。

細胞診は、細胞検査士によりダブルチェックを行い、少しでも異常所見のある標本（クラスII以上）については全ての症例を細胞検査士と認定病理専門医とのディスカッションを経て、最終報告している。

また、病理診断部医師と臨床医との連絡を密にし、問題例についてなるべくリアルタイムに相互の情報交換を行うようにしている。

業務改善、インシデント発生防止のためには、病理専属技師と病理医の連携も重要であり、毎週月曜日の午前8:20から部長、副部長、副技師長、主任技師による連絡会を行ってその週の予定などの確認や問題点の抽出などを行い、さらに毎月第2週目の木曜日午後5:15からは部長、副部長と技師全員参加による病理診断部連絡会議を開き、検体の流れや業務環境の改善に関する検討などを行っている。

4) 臨床病理カンファレンス

1) 剖検肉眼所見検討会：毎週水曜日午前9:00から、臨床担当医の参加のもと、剖検症例のマクロ所見の検討会を行っている。

2) 剖検症例総合検討会：毎月第2・第4水曜日の午後5:00より開催している。

3) 病院CPC（臨床病理カンファレンス）：卒後臨床研修センター主催で年3回ほど病院の全職員を対象とした剖検症例検討会が行われており、症例の選択、病理解剖所見の提示や討論で主要な役割を果たしている。

4) 教育型CPC（臨床病理カンファレンス）：学生（M4）の臨床病理カンファレンスの講義時間にあわせ年間15回開催している。

5) 放射線科・病理カンファレンス：毎週金曜日午後5:00から放射線科カンファレンス室で行っている。

6) 呼吸器内科カンファレンス：毎週火曜日午前8:00から、病理医が参加し、必要に応じて症例の病理像を解説している。

7) 消化器外科・内科・病理合同カンファレンス：2カ月に1回、木曜日午後6:00から開催している。

8) 骨・軟部放射線－病理カンファレンス：毎月第3火曜日午後6:00から、院外からの参加者とともに、組織所見を基に骨・軟部病変の画像診断の精度向上を図る目的で開催している。

4. 事業計画・来年の目標

1) 業務向上（効率化、迅速化、質向上）

一昨年3月の新診療支援システムの導入により、全体としては業務の効率化が進んだと考えられる。大きなインシデントは防げているが、小さいものは散見される。引き続きインシデントが起これない作業手順など防止、業務環境改善を図りたい。

2) 新たな病理技術／システムへ取り組み

大学病院の病理診断部であり、現状の技術に満足することなく、病理診断を補助する技術の向上を行うため、引き続き、新たな技術やシステム改善への取り組みを行っていく予定である。特殊染色（アミロイド染色など）や新たな免疫組織化学用抗体の検討など、病理診断に直接的に関連するものから取り組んでいる。

3) 病理診断部の新棟への移転に向けた準備

平成30年春の稼働を目指した新棟構想が走り出し、病理診断部は、手術室との動線を最優先に考えた場所に移転予定である。この移転および将来の病院機能への貢献を目指して、将来のあるべき病理診断部門の姿を考える、「次世代自治病理プロジェクト」を病理診断部内に立ち上げ、医師・技師混合で具体的な議論を行っている。

4) 病理診断部からの情報発信

病理診断部からの部外への情報発信はホームページ、ニュースレター（PATHO News）によって行っている。今後も、継続して情報発信を行い病理診断業務について、関係科の方々の理解が得られるようにしていく。

5) 勉強会・カンファレンスの充実

今年は、臨床家から要望の強かった乳腺、脳腫瘍に関する臨床病理カンファレンスを再スタートする予定である。

6) 病理診断説明外来

2014年4月に病理診断科を開設し、入院患者を対象に、病理医が病理診断について直接説明する「病理説明外来」を開始したが、その充実は今後の課題である。

病理診断部連絡先：

電話0285-58-7186、Fax 0285-44-8467

ウェブサイト：<http://www.jichi.ac.jp/pathology/>